

つき BON の「誤解をおそれず言わせてもらえば」

めざす会幹事 大津寄章三

少子化とパリ協定

昨年のおが国の出生数は97万7千人だったという。初の百万人割れである。ちなみに私の生まれた年は166万5千人であり、60年間で42%の減となる。

子供が地域からいなくなるとどうなるのか。まず学校が統廃合されてなくなってしまう。学校はいろいろな意味で地域の生産分業拠点である。学校を失った地域はまるでちぎられた葉のようにみるみる過疎化・限界集落化していく。

少子化は私が教員になった頃から問題となっており、そのうち教員の採用などなくなってしまうのではないかと言われていた。しかし、小中学校への多くの加配（生徒指導、ギャップ、スクールカウンセラー、ソーシャルワーカー等）によりそれほど減っていない。しかし、昔と比べ「校内における職員一人当たりの児童生徒数」は相当に低下しているはずである。そういえば昔は一教室45名もの児童を担任一人が切り回していたっけ。

少子化の影響をもろにうける職種もある。子供服や学習塾、産婦人科、小児歯科などはその典型であろう。

子供というのは一面騒がしくうっとおしい存在であるが、そこにいるだけで周りを和ませ明るくする不思議な力をも持っている。毎日のようにおが家に来る幼児や乳児の孫どもがどれだけ大人たちの支えになっていることか。子を産み育てるといのはどのような仕事にも増す難事業であろう。しかし大人、あるいは親というものはその過程なくしては真に人間として成熟しない生き物なのではなからうか。

かたやトランプ氏がパリ協定から離脱した、というニュースが紙面を賑わしている。牽強付会と言われるかもしれないが、この両者に共通するものは「今の自分がよければそれでいいじゃないか」という考えとそれに対する疑問である。自国の経済発展を第一に考えれば協定など国益を削ぐしがらみにしかすぎない。環境保護は大義名分として美しいが、その反面産業の成長を規制し、増産にブレーキをかけ、雇用を妨げ、自由競争を阻害する側面を持っているからである。米国ファーストを掲げるトランプ政権にとっては不法移民防止やNATO分担金と同様、アメリカのフリーハンドを脅かす要素以外の何物でもない。

少子化が日本の未来に暗い影を落とすものであることに関しても国民的合意はなされていると言っている。その根底には背に腹は代えられない、という差し迫った理由もないではないが、多くは「自分の生活ファースト」という価値観である。膨大な手間と時間とカネを要する育児を背負いたくない、という考え方はどこかトランプを彷彿

佛とさせはしないか。

将来の地球や未来の子供たちのことを考えて今の世代がしっかりとしんどさに耐えよう、というのがパリ協定の意義である。多くの国民がそれを支持するのであれば、少しは自分の問題として出生数のことも考えてくれよ、と思うのは私だけであろうか。

そんなことを考えていると、23才の母親が生後二ヶ月の赤ん坊を五時間以上も車内に放置しパチンコに興じていた結果、その子は熱中症で亡くなったというニュースを目にした。この赤ん坊は三女であるという。少子化もこんなバカ親によっては補ってほしくはないものだ、とつくづく思った次第である。2017/06/04(日)

おっばい先生の警告

産経新聞に「結婚してみなさい」と題する平田喜代美さん（助産師）の記事が載っていた。

「おっばい110番」を開業して35年がたちました。この間、日本は晩婚化・晩産化が進みました。初産が35歳以上の方がすごく増えた。20代でうちに来たら珍しいと思うくらいです。

仕事に一生懸命取り組み、さあ結婚しようと思ったら、35歳を過ぎている。でも、35歳を超えると、出産や育児をサポートしてくれるはずの親が、逆に介護が必要になるケースも増えます。そして、妊娠はいつでもできるわけじゃない。卵子はいつまでも元氣なわけではありません。（中略）。

もちろん、「結婚しない」「子供を産まない」という選択を否定するわけではありません。ただ、不妊治療で多額のお金を使い、つらい思いをしている人もいます。私が卵子や精子について話すことを、結婚に向けた一つの気づきにしてほしい。いろんな情報を得た上で、自分はどうするかを決めてほしい。

結婚できない、しない理由は、いろいろ言われます。経済力の問題という指摘もあります。でも昔は貧乏でも、多くの方が結婚し、子供を何人も産んでいた。

何が違うのか。一つは性欲の衰えじゃないかと思っています（中略）。性欲がなければ、男女は積極的に交際しない。性に対して、おっぴらに言うことは恥ずかしい、はしたないと感じる人がいます。でも、子孫を残すという使命を考えれば、恥ずかしいことではない。「性」は心を生かすと書く。大切なことなんです。

相手に対して、収入や顔のことばかり考えていると、結婚できない。自分と結婚してくれる人がいたら、ありがたうって、やってみればいい。失敗したっていい。

そして女性が結婚して妊娠しても、仕事が続けられる世の中になってほしい。国や行政は、そのための制度や環境を作してほしい。

私も一生の仕事として助産師になりました。女だって結婚もしたい、子供も産みたい、仕事もしたい。男もそうでしょう。これを実現するのが男女平等です。

産休や育休など、以前に比べ、制度は充実しました。これからの世代は、先輩が勝ち取ったものを守り、育ててほしい。それが、後に続く人のためになるんです。

50歳までに一度も結婚しない人の「生涯未婚率」が上昇し続けている。最新の2015年は男性が23.4%、女性が14.1%、これは1980年と比べて男性が10倍、女性が3倍に膨らんでいるという。上昇のきっかけの一つは86年に施行された男女

雇用機会均等法。男女の採用差別が禁じられたことで賃金格差が縮まり、男性に頼らず自立できる女性が増えたためといわれる。

大人、特に女性の自立が晩婚化・少子化を推し進め、ひいてはそれが増税と福祉の行き詰まりにつながっているとすれば何という皮肉であろう。人は人生を自己完結させるのではなく、未来に続く展望や自己の生命を継承する者のことまで考えておかねば真に充実はしない、というパラドックスであろうか。

むろん結婚を可能にする「巣づくり」にあたる経済政策は必要であろう。しかし、子供の医療費をタダにしたり保育所をいくらつくったところで、そもそも親になろうという生き方が備わっていなければ何にもならない。少子化のメインとサブは教育と環境整備にある。家族の価値をしっかりと説く教育と中産階級を育てる社会政策の両輪を進める必要がありはしないか。2017/06/03(土)

ひの会（尚友会）

竹葉秀雄先生の「ひの会」の精神を継承されている三浦夏南さんが主宰される「尚友会」のメンバー、白石さんに投稿いただきました。

白石ゆり（愛媛大学法文学部3回生）

難しい文学作品を読むことができ、多くの漢字や文法を知っているから国語教師であるとは言えない。分からないことがあれば、いつでも調べることはできる。生徒自身が調べて学ぶこともできるのだから、知識の宝庫としての教師はそれほど必要ではない。自分が何のために生きているのか、どのように生きていきたいのか、どうして勉強をしなければならないのか。国語に関して挙げるとすれば、なぜ古典や漢文を読まなければならないのか。そういった疑問を抱く生徒は少なくないと思う。模範解答のような答えではなく、私はこのようだ、と自信を持って語れる教師になりたい。そう思う一方で、自分の性格や適性を考えると、自分が本当に教師になりたいのかわからないでいた。

大学入学直後の大きな不安を抱えていた私に、本物の学問とは何かを教えてくれたのは、三浦夏南さんをはじめとする尚友会の先輩方だ。初めて先輩方の話を聞いたときの感動は、今でも忘れられない。「尊敬とは、恐れて遠ざけることではない。自分もそうなりたいと一緒に努力することだ。」という言葉を受けて、私の学問は始まった。「顔色を窺って後ろをついてこようとするのではなく、隣を歩いてくれる仲間がほしい。」という言葉聞いて、その仲間の一人に私になりたいと強く思った。

最近、やっと「私は教師にならない」という意思が固まった。飲食店の経営者になって、道義に適った商売をすること。職場を真の教育の場にすること。それが私の目標になった。国家の事業の一端を担うという責任感をもって商売をしたい。教育の場は、学校や塾だけではなく社会そのものであり、学問は決して子どもだけがすべきものではないという気づきが決意につながった。私には、祖父母が経営していた喫茶店や大叔母が経営していた居酒屋での温かい思い出がたくさんある。今、一生懸命頑張っている居酒屋でのアルバイトが本当に楽しい。働くことが好きだと思える場所だ。人には人相があるように、お店には店相がある。元気で明るく、楽しく、優しいお店の雰囲気、私が率先して作っていききたい。働いていて、涙が出そうなくらい嬉しかったことが何度かある。給料のためでなく、自分が楽をするためでもなく、いつも頑張ってくれている店長のためやお店のため、お客様のために、バイトのみんなが団結するこ

とができた時だ。想いは伝染することを実感している。

先輩方と出会って一緒に勉強するようになってから、もうすぐ2年。読書を通して、自分について深く考えることができるようになってきたから、本当にやりたいことがわかってきたのだと思う。先輩方と一緒にいると、とても前向きな気持ちになって今すぐにでも行動していかなければ…という思いに駆られる。私なりの充実した毎日に感謝するとともに、もっともっと頑張っていきたいと思っている。

同じく「ひの会」のメンバー、迫（きこ）由利菜さんの「古事記」の学習に関するフェイスブックの投稿を転載させていただきます。若い感性に感動しております。迫さんはこの4月、愛媛の大学を卒業され、故郷の広島で就職されました。

【6/1 読書会の感想】

今日から、週2日、早朝7時より読書会を行ってもらえることになりました！読書会は愛媛時代から参加させてもらっていて、社会人になっても読書会は必要だと思い、無理言って時間を設けてもらえることになりました。

そして今日が1回目。なるべくその日の気づきを書き留めるようにしようと思います。

今日は古事記の朗読でした。

神世七代の冒頭部分には、高天原(たかあまはら)、つまり大宇宙のことが書かれています。

科学で解明される何千年も前から、昔の日本人は直感的に宇宙というものがあるということを理解していたということが凄いですね。

壮大な話すぎて感想を一つにまとめたくありませんが、その中でも特に今日一番大事だと思ったのは、「実相を見よ！」という部分でした。

高天原(宇宙)には一つの唯一絶対神がおられます。しかし唯一絶対神といっても、西洋の観念のように、絶対神が魔法のようになんでも好き放題生み出してしまう神様ではありません。天之御中主神様が陰と陽の神様を一つに結ぶことによって、新たな神様が生まれます。これは、世界の秩序であり、実相です。

神世七代は実相が綴られているので、全ての物事に繋がっていて、憲法の問題に関しても、実相を離れた論議をしてはいけないと思いました。

例えば今改憲をすべきという理由では、武力を持たなければ日本が危ないとか、拉致被害者を取り戻せないとか、家族法規定が無いと日本人の大切に家族感が失われつつあるとか、言葉がところどころおかしいとか、自衛隊が違法状態であるとかが思いつきますが、保身から来る理由を唱えてはいけないんだなと気付かされました。だから、日本に与えられた使命、理想を現実に顕現するための理由である必要があります。

日本の理念は、神世七代の世界に表現されています。しかし、現在は国民と天皇が切り離され、日本という日本が失われつつあります。

古事記に立ち返ると、純粋に現行憲法をそのままにしておくわけにはいかないと思えるような気が

します。

また、憲法の問題に限らず、自分が日本の理念に寄り添って何が出来るかを、実相を見つめながらよく考えていこうと思いました。

古事記の冒頭は毎日読むのがいいそうなので、できるだけ読むようにしたいと思います。

補足するととてつもなく長くなるので、詳しく説明出来ませんが、以上が今日の感想でした！

【6月5日読書会】

本日も古事記の朗読をしました！
今日は「神世七代の下り」の感想です。

ここも一言で説明し尽くせない内容ですが、あえて一つ取り上げてみます。

古事記の冒頭、「神世七代」では陰陽・男女の働きを持つペアの神様が生まれてきます。
この下りの最後の方で、於母陀流(おもだる)神様と妹あやかしこね阿夜訶志古泥(あやかしこね)神様が出てきます。

ちなみに、古事記ではとにかくたくさん神様が出てくるのですが、これまでに出来ている神様は、上に浮かぶ力・下に沈む力、出っ張る力・引っ込む力、無限大の力を持つペア…とわかりやすい名前でした。

でも、於母陀流神様と阿夜訶志古泥神様も陰陽・男女の働きを持つ神様ですが、私の中ではなぜペアなのかよく理解出来ていませんでした。

簡単にまとめると、於母陀流神様は、一切の物事が足りている、この世は完全円満なんだー！という神様、阿夜訶志古泥神様は、於母陀流神様や、その前に出てきた神様に対して、「ああ、かしこいなあ。素晴らしいなあ。」という神様です。

なんだか神様の中でも特に不思議な名前ですね。

この後のお話で伊耶那岐命、伊邪那美命が地球のようなものを生成されるのですが、重要なのは、地球ができる宇宙の現象がない実相だけの頃の世界に、既にこの世は満ち足りていたんだと日本人が直感していたことがまず素晴らしいんです！

つまり、よく西洋的な観念では、この世は完全ではないから、人間は自然を支配する権利を与えられた…とか言うようなことを聞く事もありますが、実相というか、前提として、まず世界は完全円満である。だから、必ず上手くいくという心理が、人間が生まれる前、ましてや、地球が生まれる前からあったということになります。

これってすごいと思いませんか？

だって、どんな困難な問題も、必ず救われるんだと宇宙時代の神様(ご先祖さま)が保証してくださっているんです。

そして、もう一つ重要なのは、完全だ、という神様がいるからと言って、この世界を上から目線で見るとはならず、また、完全

だからなすがままに生きるしかない謙遜し(悲観的になり)すぎるわけでもなく、ただその完全円満さに対して「ああ、かしこいなあ、素晴らしいなあ」と有難さを感じられることが神様の時代からあるということです。

よく、日本人は感謝する民族だと聞きますが、

それは神様から引き継いだ神ながらの思想であり、子孫である現代の私たち日本人の考えの根幹にも今なお根付いているのかと思うと、本当に「有難い」奇跡だなあと感じました。

だからやはり、何事にも有難さを感じて生きていくことは大切なんですね。

最後に、古事記を読んでいると、神様は凄いなあと離れた立場で考えてしまいがちですが、神様は私達のご先祖さまだと思うと、古事記からより一層自分たちの使命(ミコト)を意識でき、親しみも感じられるので大切にしていきたいところです。

以上が今日の感想です。

6/9(金)読書会

【夫唱婦和の原理】

今朝も朝7時から読書会をしました。

前回に引き続き、伊邪那岐命(いざなぎのみこと)、伊邪那美命(いざなみのみこと)がおのころ島をつくれ、島に降りて来て、みとのまぐわいを行う場面です。

ここはとても重要な場面です。

ここで大切なのは、男女のあり方についてです。

「夫唱婦和」をわかりやすく言うと、男性が先に立ち、女性が男性に従うという意味で、現実世界でも最も上手くいく方法がここに書いてあります。

最近では女性進出とか、女性差別とか肉食系女子などという言葉が常識になっていますが本当にこれはいい事なんでしょうか？

私は学問をする前から、これについて完全には受け入れられない感覚がありました。

そして古事記でも、これでは上手くいかない未来が描かれています。

「女性は弱くて差別されている」という考え方は西洋的なとても危険な考え方なんです。

だから、新聞でも恒例テーマとなっているため不気味な怪しさを感じますね…。

私も、日本では昔、男女の差別があったんだと思い込んでいました。

しかしそれは間違いで、日本的な考え方では、男性には男性の役割があって、女性には女性の役割がある、という差別とは全く異なった価値観なんだそうです。

例えば、中庸に位置づけられるお米を炊く時に、男性の陽の働きと同じ火と、女性の陰の働きと同じ水を使います。火が少し強めでないと、べちゃべちゃのお米が出来てしまいますね。

このように、例えばカカア天下の家庭では、子供が弱い子になったり、体に何らかの障害が出ることもあるそうです。

確かに、お父さんはいつもカッコよくて、そんなお父さんを影で支え、尊敬しているお母さんという構図が一番子供にとって安心できる状態のように思います。

女性もたまには家から出て仕事をしなければならなかったり、先頭に立たなければならない時もあると思いますが、女性のあり方としては、男性を立てて陰ながら支えることが大切なんだと思います。

うちは母子家庭のため、ここについては将来家庭を築く時に心得ておきたいなと思いました。

今は混沌とした世界にあります。

でも伊邪那岐命、伊邪那美命が先に失敗してしまったように、今の世界も心の影が出てきているだけで、これから良くなる前触れである、自壊作用が出ているだけなんじゃないかと思いました。だから、みんながそれぞれの役割を感じて正していけば必ず良い未来はやってくると思います！だって、既に答えは分かっているのだから…。

本日はまだまだ語り足りないような気がします、以上が今日の学びでした。

以下、迫さんの紹介を兼ねて転載致します。

【"ハーフ"談議】

ところで、ハーフは一体日本でどのように過ごしているのでしょうか？
私は一定のパターンがあると思います。

それは、自分のアイデンティティは一体何処にあるのか？という事を特に純日本人よりも深く探そうとする時期があるのではないかということです。
迷える子羊のような状態ですね。

私も自分のルーツを大人になる前に知っておこうと思って留学をしたこともあります。

でも、出た結論としては、「自分は日本人なのだ」という結論でした。

結局は、長く住んできた日本が一番大好きだし、日本という土地に住み、日本人という国籍を持っているなら日本人を極めることが国への礼儀だと思います。

だから、私はどんな日本人よりも日本人らしく生きるために、古人の知識教養を身につけて素敵な大和なでしこにちかづきたいと思っています。

ハーフにも色々な境遇があるので、外国人の親に影響されて外国人っぽい行動をとる人がいます。ハーフが嫌だと思っている人もいれば、自慢したがる人もいるかもしれません。

でも、結局はに日本に住んでいるのだから、日本人としての教養や礼儀作法や価値観を大切にして生きていくことが大切なんじゃないかなと思うんです。

それもなにも、結局は日本の教育が、英語に高い価値を付けているのと、日本の歴史に誇りを持たせないような方向へ持っていつていることは深く影響していると思うので、責められることはありません。

一方、日本人に多いのが、純粋な日本人の血を持つことに誇りを持っていない人が少なくないというか、外国に変な幻想を持っているような気がしてなりません。

私は、純粋な日本人の血を受け継いでいるということはとても素敵な事だと思います。

普通にかんがえて、世界地図のなかのとってもちっちゃい土地に住む超貴重な人材なんです。だから、もし劣等感のようなものを感じている人はもっと自信と誇りを持ってほしい。

例えお世辞で言っていたとしても、言葉に出すと心に根付いてしまう恐れがあるのでなるべく避けて欲しいです。

そういう私はというと、半分は日本人の血を引いているわけなので、それに対して誇りを持って生きていきたいという思いです。

色々と思うことは沢山あるわけですが、ハーフだということに触れてほしくないわけでは勿論ないので安心してください。少しは話題に取り上げてもらえると興味を持ってもらえていると思って私も嬉しいです。

ただ、純日本人の方々へ、もっと誇りを持ってほしいなという願いを込めて、綴らせていただきました。

拉致問題

特定失踪者問題調査会（代表・荒木和博氏）の地道なご活動には頭が下がります。今回は長文ですが、横田めぐみさんが拉致された現場検証に関する報告書を掲載させていただきます。

【調査会 NEWS2427】（29.3.29）＜特別検証第5回（新潟）報告＞

特定失踪者問題調査会では昨年末から横田めぐみさん拉致事件に関わる各種情報の収集と整理を行ってきた。これは特定失踪者の調査を行う上で政府認定拉致被害者の拉致状況が一つの指針となること、さらに拉致問題全体で誤解あるいは隠蔽されてきた部分が極めて大きく、それを明らかにするためにも政府認定拉致被害者に関する調査が必要であると考えた次第である。

その一環として横田めぐみさんの拉致についても特別調査班を中心に情報の見直しを行ってきたところ、いくつかのことが明らかになったため今回の特別検証を実施することとなった。以下はその報告である。

今回、当会が横田めぐみさんの拉致事件に関して再検証を行うきっかけとなったのは、後述する女子学生の水死事件の新聞記事である。

めぐみさんが行方不明となって 10 数時間しか経過していないときに同じ新潟市内の海岸で発見されたこの遺体について、警察当局がめぐみさんのご家族に身元確認を行っておらず、ご家族もこの水死体について全く記憶していなかったという事実が判明したことに端を発し、私たちは当時の対応に疑問を持ち始めた。

また、めぐみさんが拉致された昭和 52 年（1977）11 月前後、新潟県内で幾つもの水死事件が報道されたが、そのいずれもが自死を示唆する言葉で締めくくられていた。これは警察当局の見解をそのまま記事にしたと思われるが、今回の検証では直接現場を訪れることはできなかったが、調査会ではこれらの水死事件にも注目している。果たして当時新潟で起きた拉致は横田めぐみさんだけ

だったのか、失敗した拉致もあったのではないだろうか。

もちろん水死事件は全国で起きており、その全てが疑問の対象になる訳ではないが、家族にとって水死した理由が不明なまま「自死」として処理されてしまったケースがなかったかという点について調査することも必要と感じている。

1、概要

日程 平成 29 年（2017）3 月 24 日 12:30～14:00

ルート 寄居中学校前集合、ブリーフィング後スタート。寄居中→営所通→旧横田家→横田早紀江さん反物事案現場→高校生が追われた現場→寄居中北側不審な乗用車の目撃場所→寄居中前、ブリーフィング後終了

参加者

調査会役員：代表荒木・副代表岡田・専務理事村尾・常務理事杉野・武藤

特定失踪者家族：大澤昭一さん・中村クニさん

家族会：増元照明さん

支援者等：西村眞悟前衆議院議員（調査会顧問）・高橋正救う会新潟会長・池田正樹さん（横田めぐみさん同級生）・葛城奈海「しおかぜ」アナウンサー・島尾百合子救う会兵庫副代表他

2、拉致現場について

(1) 曾我ひとみさん証言

曾我ひとみさんが証言したとする情報で、読売新聞平成 17 年（2005）9 月 16 日付に次のような記事が掲載されている。

1977 年 11 月に北朝鮮に拉致された横田めぐみさんが、翌 78 年に曾我ひとみさん（46）と初めて会った日の夜、「家の近くの曲がり角で男の人に捕まえられた」「すぐそばの空き地に連れて行かれた」と拉致の瞬間を語っていたことが 15 日、分かった。

めぐみさんは、新潟市内の自宅近くの丁字路で足取りが途絶えてから、目撃証言がなく、拉致の状況は全く分かっていなかった。

その一端が明らかになるのは初めてで、警察当局は、周辺の空き地に引きずり込まれ、船で連れ去られた疑いが強いとみている。

曾我さんは、19 歳だった 78 年 8 月 12 日、新潟・佐渡で母親のミヨシさん（当時 46 歳）とともに拉致され、数日後、平壤郊外の「招待所」と呼ばれる施設で、9 か月前に拉致されていためぐみさん（当時 13 歳）と引きあわせられ、共同生活を始めた。

関係者によると、2 人は対面初日、招待所が用意したジュースや食事を取るうちに、うち解けた会話ができる仲になった。

拉致が話題になったのは、その夜、めぐみさんが、足を引きずっていた曾我さんに、「どうしたの」と問いかけたことがきっかけ。

曾我さんは、その言葉の優しさに、自分が拉致されたことを打ち明けると、めぐみさんは「私もバドミントン部の練習の帰りに、家の近くの曲がり角で男の人に捕まえられた」「すぐそばの空き地に連れて行かれた」と語り始めた。

この時、めぐみさんは実行犯の人数などには触れなかったが、2 人は「本当に怖かったね」「す

ごく恐ろしかった」とささやき合って眠りについたという。

この証言について、3月22日メッセージ収録の際曾我さんに確認したところ、「そのような証言はしていない。角を曲がったところで後ろから襲われたとしか聞いていない」とのことだった。

なぜ情報が矛盾しているのかは不明だが、「家に続く曲がり角」「空き地」というキーワードは何もなければ出てこないはずである。

(2) 警察犬

これまで警察犬の立ち止ったとされる地点（〔1〕の交差点位置）が一般的に拉致現場とされていた。また、これと別に〔1〕から若干寄居中よりで警察犬が立ち止まったのではないか（〔2〕の交差点位置）という情報もあった。ちなみにこのどちらも当時近くに空き地があった。

めぐみさんが拉致された時刻から警察犬が捜索に投入されるまでの時間経過や、めぐみさんが歩いた同じ道路上を家族を含め幾人もの人々が捜索のために歩き回っていたことなど、複数の要因が重なって警察犬による足跡追及に何らかの影響を与えてしまった可能性がある。また、何らかの理由で当局に拉致現場を別のところにする必要があり、あえて警察犬の話を出すことによって情報操作をした可能性もある。

(3) 女子大生（当時）の証言

事件当日の午後6時30分頃、横田家の南側隣家2階に下宿していた新潟大学の女子学生が自室の掃除をしていたところ「きゃっ、助けて！」と瞬間的な悲鳴を聞いた。遠くから聞こえてきた声ではなかったため、直ぐに自室の窓を開けて外を窺った。しかし庭木が邪魔したのと、暗かったために路上は見え、しばらくの間目を凝らし、耳を澄ませていたがそれ以上何の音も聞こえなかったため、窓を閉めてしまった。

翌日、大学の授業を終えて帰宅すると下宿先の奥さんから「昨夜、隣家の女の子が帰宅しなかった。新聞記者が取材に来た」旨を聞かされたため「昨夜、こんなことがあった」と悲鳴が聞こえたことを話すと奥さんから「すぐに警察に電話しなさい」と言われたため警察に通報した。その日のうちに捜査員が事情聴取に訪れたがこの際女子学生は状況をメモしていた物を捜査員に提出している。

2,3日後にまた捜査員が来て再度事情を聞かれた。その後、女子学生が大学に行っている時間帯に捜査員が下宿に来て、女子学生の部屋に入り窓を開けるなど、部屋の検分を行っていった。それ以降は警察から何の連絡もなく、20数年が経過した平成14年（2002）9月の小泉首相訪朝後、既に他県に住んでいた元女子学生のもとに新潟県警の捜査員が訪れ、当時提出したメモを持参して筆跡が元女子学生のものか等を確認し、再度事情を聴取していった。

本件について、現地で葛城奈海・しおかぜアナウンサーの声で悲鳴がどこまで聞こえるかを検証してみた。営所通の角から元女子大生の下宿していた家の角までは約110メートルある。当初この距離では声をあげても聞こえないのではないかと思っていたが、予想よりは鮮明に聞こえた。ただし、あくまで遮るものがない路上で、かつ注意して聞いていたという条件のもとである。また、11月中旬であるから家の窓はほとんど閉まっていたと思われ、また110メートル離れて聞こえたならこの間にある家でも聞こえたはずであり、他の証言がないことはやはり元女子大生の下宿先の極めて近くで起きたことを推測させる。

なお、めぐみさんが拉致され行方不明となった後、捜査員は横田家周辺の聞き込みも行っていたが、ある捜査員が周辺を回るときに母・早紀江さんも一緒について回っていた。この時、捜査員はこれまでの聞き込みの際に「お母さん！」という声を聞いた人がいると漏らしたが、早紀江さんが確認すると「間違いだった」と言われ、何処の誰がそのような証言をしていたのか話してもらえなかった。

(4) 地理的条件

前述のようにめぐみさんが拉致された場所は、めぐみさんが拉致された当日夜に出動した2頭の警察犬が立ち止ったとされる地点であって、〔1〕のT字路の交差点とされてきた。また、別途情報〔2〕のT字路交差点との説も出ていた。しかし、いずれの場所も改めて確認してみると、遺留品や拉致の痕跡が発見された場所ではない。

当時めぐみさんが拉致されたとされていた地点の営所通りを挟んだ向かい側（西大畑町）には新潟大学の商業短期大学部キャンパス（本部は旭町の本校内）が設置されており、この学部は1学年80名規模の夜間の3年制で夕刻から授業が行われていたとの証言があり、めぐみさんが拉致された当日は平日でもあることから夕刻の時間帯には学生の行き来もあったと思われ、人目に付く場所であった。

この商業短期大学部前にはバスの運行路線（現在の浜浦町線）があり、当時の時刻表では午後6時台でも約7分に1本の割合でバスが走っており、暗かったものの人、車両の通行もあった場所である。拉致をする側から考えれば待ち伏せや尾行などの目撃されるリスクが大きい。脇道に入れば人通りは少なくなるので、大通りがあえて使われた可能性は低いと推定される。

結論

以上のような条件から考えた場合、拉致現場は元女子大生が悲鳴を聞いた家の角、横田家のすぐ近くであったと推定される。

3、警察上層部及び政府の認識について

(1) 当時の状況

拉致当日の夕刻、午後6時30分を過ぎても帰宅しないめぐみさんのことを心配し始めていた母・早紀江さんは、午後7時を過ぎて1人で通学先の寄居中学校に行ったが既にクラブ活動は終わり、生徒は残っていなかったため、急いで自宅に戻りめぐみさんの弟2人を連れて通学路沿いを探し、さらに海岸までも探し回ったがめぐみさんの姿はなかった。クラブ活動の顧問にも連絡し、早紀江さんからの連絡を受けた父・滋さんも帰宅して付近を捜したが見つからなかったため午後9時50分、警察に通報した。

通報を受けた警察は直ぐに所轄署の新潟中央署と新潟東署から捜査員を横田家に派遣した。警察犬は2頭が出動し、めぐみさんの足跡追及のため、ご家族からめぐみさんのパジャマを借り受け、めぐみさんが最後に同級生と別れた交差点からめぐみさんの足跡追及を行った。

新潟中央署は同時に全署員220名を非常呼集して捜査にあたらせた。横田家には捜査員が電話の録音装置などを設置して待機し、横田夫妻も電話の傍で寝ていた。水道町周辺には多数の警察官が出ており、当時水道町1丁目に住んでいた住民の一人は夜遅くに帰宅後、家族に「何か大きな事件があったんだね、警察官がいっぱい出ている」と伝えていた。翌朝午前5時からは県機動隊760名を投入して松林の中などで捜索にあたらせた。

以上のような捜査態勢は通常の誘拐事件の捜査とは全く異なっている。めぐみさんが行方不明となり、「身代金目的」の誘拐の線も疑って捜査員や電話の記録装置などを横田家に配置していた訳だが、本来このような捜査は人質となっている可能性がある人の生命の安全性を優先するため秘匿性が求められており、それゆえ被害者宅に出入りする捜査員には変装することや装置も偽装して持ち込むことを要求している。

ところが、めぐみさんの場合、確かに横田家には捜査員が配置されたりしているが、市街地にも一般の住民が見て異常と感じるほど警察官が出ていたこと、まだ犯人からの連絡がなくても「誘拐」の可能性が晴れていないと思われる翌朝の午前5時から機動隊員を760名も投入して捜索に当たら

せているのは、仮にめぐみさんが身代金目的で誘拐されていたなら、犯人に「人質を処分してください」と言っているに等しい。逆に当初から北朝鮮による拉致と認識していてめぐみさんの移送を阻止しようと考えたのであれば対応に矛盾はない。

(2) 女性の水死体

めぐみさんが行方不明になった翌日の16日午後、水道町から7～8km離れた上新栄町の海岸で若い女性の水死体が漂着するという事案があった。この女性の身元が分かったのは17日である。しかし横田早紀江さんはこの遺体に関する身元確認をしておらず、その事実すら知らなかった。

身元確認をしていれば家族が忘れるはずはなく（実際、ご家族はその後見つかった身元不明遺体の確認を行っており、鮮明に記憶している）、しなかったということは当初からこの遺体がめぐみさんでないと分かっていたということである。この点も当初から拉致と認識していたことの傍証になる。

(3) 元新潟中央署長の証言

おそらく平成20年（2008）11月15日、新潟市での講演に行っていた横田夫妻のところを事件当時新潟中央署長だった松本瀧雄氏が訪れ、当時の馬場・救う会新潟会長同席のもと「いなくなった時から、あの人たち（北朝鮮工作員）の仕業だと思っていた。ずっと表に出せず申し訳なかった。私が生きている間に伝えたかった」と語っていた。松本元署長は親しい記者にもこのような発言はそれまでいっさいせず、その後亡くなるまでにもしなかった。

これは本人だけの問題ではなく、組織上も最後まで秘匿しなければならないことだったからではないか。前述の初動体制などは一警察署長の判断でできることではなく、最低限警察庁レベルの判断があったと考えざるを得ない。

このときの面会を報じた新潟日報には次のような記述がある。

「面会后、取材に応じた松本さんは、横田さんと手紙のやりとりを続けてきたことを語り、『めぐみさんが日本にいる間に保護・救出できなかったことが、結果的に31年という年月につながってしまった』と述べた」

この証言は記者に語ったものだが、「日本にいる間に保護・救出できなかった」という言葉は当時の警察の動きとも重なるものである。

(4) 拉致発覚以前の横田めぐみ失踪についての調査

事件当時ではないが、平成6年（1994）頃、新潟県警の担当者は上司から他の課員にも知られないようにとの指示を受け、横田めぐみ失踪について調べていたという。この時期は韓国政府から日本政府に「1970年代後半にバトミントン練習帰りの中学1年生の少女が北朝鮮工作員に拉致された」との情報をもたらされた時期である。状況からすれば県警本部の判断ではなく、警察庁からの指示である可能性が高い。「現代コリア」平成8年10月号で明らかになった拉致された少女が横田めぐみさんと特定されたのは同年末であり、国会質疑と報道で氏名が公表されたのは翌平成9年（1997）2月だが、この数年前にも政府は横田めぐみさん拉致について知っていたということである。

(5) 結論

以上の諸要件から考えるとき、警察庁及び政府中枢では昭和52年（1977）11月15日の事件発生直後から横田めぐみさんが北朝鮮によって拉致をされたと認識していたものと思われる。

まとめ

これまでも私たちは拉致問題についての政府・警察の隠蔽を指摘してきた。例えば松原仁・元拉致問題担当大臣兼国家公安委員長は一昨年調査会の記者会見で大澤孝司さん（昭和 49 年佐渡で失踪）と藤田進さん（昭和 51 年川口で失踪）について、大臣在任中 2 人が拉致されて北朝鮮に生存していると認識していた旨明らかにしている。しかし、2 人ともその後拉致認定はなされていない。政府認定拉致被害者ですら、具体的にどのように拉致をされたのかについては、警察は明らかにしていない。特定失踪者になれば論外である。

山本美保さん DNA データ偽装事件は、明らかに政府中枢がかかわる拉致問題のもみ消しである。これは犯罪行為であるが、拉致と分かりながら担当官庁が明らかにしてこなかった問題は、おそらく当時の総理大臣ですら手を付けるのが難しかったのだろうし、いわんや現場の担当者に責任を負わせることはできない。

また現在の担当者もこれまでのことを受け継いでいるだけであり、例えその対応に疑義があつたとしても、現実には疑問を呈することはできないだろう。したがって、過去のこと、現在までのことについて責任を問うべきではないと思う。

しかし、総理大臣から現場の担当者まで、未来に対する責任を負っていることだけは間違いない。これまでが誤っていたという認識に基づいて次の策を立て、実行していかなければ、現在の被害者も帰ってこないし、今後さらに被害者が出る可能性すらある。

今回拉致問題の象徴であり、これまで膨大な報道がなされてきた横田めぐみさん拉致ですら、重要な部分が欠落していたことが明らかになった。同様の事象は他の政府認定拉致被害者・特定失踪者についても多数あるのだろう。あらためて情報の再度の検証が必要と考える。

私たちはもちろんこれまで通りの調査を続け、真相究明に努めていくが、政府・関係機関は公式に認めることができないとしても、これまでに少なからぬ誤りがあったとの前提で、あらためて拉致問題に取り組まれるよう期待する。

最後に、今回の特別検証にご協力いただいた関係各位に心より御礼申し上げ、報告とする次第である。

以上

【調査会 NEWS2433】(29.4.6) <警察犬>

横田めぐみさんが拉致された場所は寄居中学前の大通り、「営所通り」から横田家の方に曲がる場所であると、長年言われてきました。

その根拠は「ここで警察犬が止まった」ということでした。しかし 3 月 24 日の特別検証で、私たちはもっと家に近い場所でやられたという結論に達しました。その理由は報告でお知らせした通りですが、逆に考えるとなぜ営所通りの角とされてきたのか不思議です。

意外に思われるかも知れませんが、警察は横田めぐみさんのご家族に対して、どこでどう拉致されてどこから北朝鮮に連れて行かれたか説明していません。これは他の政府認定拉致被害者、特定失踪者も同様です。営所通りの角で警察犬が止まったというのも、正式な発表ではなかったはずで

警察犬も生き物ですから、そのときのコンディションもあるでしょうし、あるいは臭いが付いてからの時間とか、そのときの気象状況とか、様々な制約はあるはずです。それでも警察犬を使った捜査結果が証拠として採用されるというのはそれなりの信頼があるからだと思います。だから本当にそこで止まったというのであれば、それはそれで重要な情報なのですが、それ自体がどこから出てきた情報なのかよく分からない。

基本にもどって考えると、いかなる情報でも信憑性と合わせて、それをどう使うかが極めて重要です。私たちは山本美保さん DNA データ偽装事件で、警察及び政府の対応を批判し、また否定し

ていますが、それは DNA 鑑定自体を否定するものではありません。むしろ現在の DNA 鑑定は相当の精度があることを、私自身この事件のおかげで大分勉強しました。問題はそれを使う人間の問題で、それに不純な意図が入れば山本美保さんの事件であれ、足利事件であれ鹿児島的事件であれ、全く異なった結果になってしまいます。

横田めぐみさん拉致における警察犬の情報は、やはり何らかの意図があつて、流されたことではないかと思っています。

愛媛拉致議連総会の記念講演会が6月27日(火)ひめぎんホールで開催されます。講師の蓮池氏のご著書の一部ご紹介致します。

「拉致と決断」(新潮文庫)恋人と語らう柏崎の浜辺で、声をかけてきた見知らぬ男。「煙草の火を貸してくれませんか」。この言葉が、〈拉致〉のはじまりだった——。言動・思想の自由を奪われた生活、脱出への希望と挫折、子どもについての大きな嘘……。夢と絆を断たれながらも必死で生き抜いた、北朝鮮での24年間とは。帰国から10年を経て初めて綴られた、迫真の手記。拉致の当日を記した原稿を新たに収録。

本文より…

このままでは、わが子ども、十分に成長できないまま大人になってしまうのではないか。それは憂慮ではなく、「現実」の恐怖だった。(略)考えた末に、子どもたちが学校に戻る時、煎った大豆を持っていかせた。ひと学期分の量なので、最低4,5キロになったが、それでも1日に2回5,6粒ずつ数えて食べると念を押した。学期の途中で郵送してやればいいのではないかと思われるかもしれないが、食べ物の小包は届く前に郵便局員に奪われてしまうのが、常だった。(略)どうか、次の休みには、少しでも成長して帰ってくれ、と祈るような気持ちで子どもたちを送り出した。(p.77)

拉致されて数年してころ、私は故郷に帰りたいという思いを断ち切って生きようとしていた。万が一にも帰れる可能性がないのに、それを切望したところで、目の前の現実が辛くなるだけだ。下手をすると日々自分の過去を悔いて嘆いて過ごすという泥沼にはまりかねなかった。「なぜあの時あの海岸に行ったのだろう。なぜ砂浜で人影を感じたときに、すぐその場を離れなかったおだろう」と。(略)だからといって、故郷は忘れようとして忘れられるものではなかった。何かにつけ思い浮かび、知らず知らずのうちに望郷の念にひたっている自分がいた。そんなときは胸の中の感情を無理に追い払おうとしても追い払えるものではなかったので、故郷に帰りたいと思うことと故郷を懐かしむことは違う次元のものだと自分に言い聞かせ、追憶に身をまかせたのだった。(p.98,99)

これならたやすく渡っていける!そんな閃きが胸をさらにときめかせた。中国の地に逃れれば、日本領事館や大使館と連絡が取れるかもしれない。空想はますます膨れ上がった。『ときは金なり』という改革開放政策を象徴するかのような対岸のスローガンも、私を手招きするかのようだった。北朝鮮では見られない中国の異質さが、この日本人拉致被害者を温かく受け入れてくれるのではないかという淡い期待(というより錯覚)を生じさせたのだ。感情の自制が利かなくなっていく。(p.111)

翻訳の仕事のため、送られてきた日本の新聞をめくっていると、拉致被害者家族会の結成時の写真が載っていた。心臓が激しく高鳴るなか、私の目は必死にある面影を探し始めていた。長いテーブルを前に並んでいる十数人の顔をひとりひとり確かめていく。「いた!」— 高校

卒業アルバムに収録された私の写真をぐっと握りしめて座っている親父を、その後ろに緊張気味に立っているお袋がいたのだ。瞬間、糜爛性潰瘍のある十二指腸のあたりがギュッと締め付けられ、酸っぱい胃液がこみ上げていた。20年ぶりにみる両親だった。(p.200, 201)

良書ご紹介

『置かれた場所で咲いた渡辺和子シスターの生涯』

「人間に上下はありません。しかし、人格には上下があります」

ノートルダム清心女子大学大学院元教授・保江邦夫著 マキノ出版

2・26事件、大失恋、ルルドの泉、マザー・テレサ……

シスター渡辺は、「人生の穴」について、講演やエッセイでたびたび取り上げてきました。

ここでいう人生の穴とは、突然、人を襲う病気や事故など数々の不幸のことです。人生には、そういう穴がぼっかりと開くことがあります。そのとき、穴の存在を嘆き、悲しみ、恨むだけに終わってはいけなと、シスターはいいます。

穴が開いてしまったとき、その穴を埋めることも大切かもしれません。しかし、穴がなかったら見えなかったものが、見えてくることがあります。それを見ようとするとき、初めて、その穴に意味ができてくる、とシスターはいうのです。

そして、ある女子大生の例を引いています。

その学生は、夏休み明けに、「シスター、私の人生に穴が開きました」といつてきたのです。

夏に婦人科の手術を受けたところ、子供の産めない体になってしまったのだそうです。医師から宣告を受け、むろん、その学生は大きなショックを受けました。

その学生には、結婚を前提につきあっている男性がいました。しかも、その男性が無類の子供好きだったのです。

迷った末、婚約者に打ち明けました。

すると、婚約者は、「心配しなくてもいい。僕は、赤ちゃんが産める君と結婚するんじゃないくて、"君"と結婚したいのだから」といつてくれたのです。

そこまで話して、その学生は、シスターの前で泣いてしまったそうです。

「もし私の人生に、この穴が開かなかつたら、結婚しても一生、相手の誠実さと愛の深さを、私は知らないで過ごしたかもしれません」

あるエッセイでは、シスターは、同様に人生の穴についてふれた後、次のように書いています。

「深い井戸の底には、真昼間でも天上の星の影が宿るといい、井戸の穴が深ければ深いほど、その影は鮮明だという。肉眼でふつう見えないものを、穴があいたが故に見えるということは、それだけ人生が豊かになったということにもなる」(p.123～125)

◆◆◆ 事務局から ◆◆◆

☆第72回国民体育大会（愛媛国体）が9月30日（土）から10月10日（火）に、第17回全国身体障害者スポーツ大会が10月28日（土）から30日（月）に開催されます。昨年秋に愛媛県庁担当部局と日本会議愛媛県本部との打ち合わせが始まり、6月12日に天皇皇后両陛下愛媛県奉迎委員会が設立されました。

以下の4つの事業が計画されています。

- 1) 天皇皇后両陛下ご来県の際、奉迎提灯行列（パレード）を行う。
- 2) 両陛下をはじめ、皇族の方々のご来県時に沿道などにて国旗小旗を配布し、奉迎する。
- 3) 皇室を戴く我が国の尊い国柄についてひろく県民に啓発活動を行う。特に青少年層への啓発に力をいれる。（ちらしの作成、配布）
- 4) 記念記録冊子を作成する。

これらの費用は、すべて委員会が調達することになっており、国や県からの補助は一切無く、国から小旗が1万本支給されるのみだそうです。そこで、1200万円と見積られる上記の費用は、団体・企業・個人から協賛会費を募るそうです。団体・企業は、一口1万円から、個人は1千円から、いづれも何口でも可、でございます。

協賛者はお名前が記念記録冊子に掲載され、冊子が贈呈されます。あらためて次号でお知らせ致します。

★平成28年度の決算報告書を同封いたしております。28年度は、4月の親学アドバイザー認定講座、10月、3月の親学基礎講座を中心にアドバイザー研修や公開講座と、親学の推進に明け暮れた感のある年でした。ご支援に心より感謝申し上げます。

★昨年春の救う会愛媛の拡大役員会のあと、「なでしこ通信」63号に救う会の払込用紙を同封して皆様にご協力をお願いしましたところ、32人の方から6万2千円が振り込まれた旨、救う会よりご連絡いただきました。ありがとうございました。

★会費の切れる会員の方には払込用紙を同封しております。引き続きご支援下さいますようお願い申し上げます。年会費は現在、2000円でございます。封筒のアドレスシールの住所のあとの数字は今まで会費を納入していただいた〈年と月〉を表しています。

★67号でもお知らせ致しましたが、会員名簿の管理用に使っていた古いパソコンが突然駄目になり、名簿が出なくなりました。随分前の古い名簿をもとに万全を期してマニュアルで復元しましたが、会費納入状況の記録にもしご不審がございましたらお手数で恐縮でございますが、事務局までご連絡下さいませ。誠に恐れ入ります。

健全な男女共同参画社会をめざす会

会長 青井美智子 〒791-0221 東温市上村甲218

電話 090-8971-7721 Fax 089-964-3903

<http://www.mezasukai.com/> メール michikoaoi25@yahoo.co.jp

.....